

## 5 狭めの同化

ある音が隣接音の影響を受け、隣接音と似た音に置き換わる現象を**同化 (assimilation)**という。ある音が隣接音の狭めの度合いの影響を受け、狭めの点で似た音に置き換わる現象を**狭めの同化 (assimilation in stricture)**と呼ぶ。狭めの同化により、影響を受ける音の狭めの度合いは変化するが、声と調音位置は変化しない。同化は調音器官の動きを節約する方向で進む。狭めと同時に声と調音位置が変化しない理由は、話し手の都合による音変化が聞き手にとって認識可能な範囲に留まるようにとの「歯止め」が働いているためである。この「歯止め」は、以下で詳述するように、狭めの度合いの変化が狭めの軸の階程を1段階ずつ変化することにも見られる。

狭めの同化は狭めの軸に沿う漸次的な音の変化で、発音され、認識される軸上の点は3つの**階程 (grade)**で表すことができる。実例が多いのは、閉鎖音、摩擦音、母音類（それぞれ、階程0, 1, 2）の3階程で、1段階ずつ変化する。

	両唇	歯	歯茎	後部歯茎	硬口蓋歯茎	硬口蓋	軟口蓋
0: 閉鎖音	[p] [b]	[t̪] [d̪]	[t] [d]			[c] [j]	[k] [g]
1: 摩擦音	[ɸ] [β]	[θ] [ð]	[s] [z]	[ʃ]	[ʃ] [ʒ]	[ç] [j]	[x] [ɣ]
2: 母音類	[u]			[ɤ]	[i]	[i]	[u]

[i] は音節の頭位では硬口蓋歯茎音である。[ja] と1音節で発音すると音節の頭位に [i] がくる。[i] [a] と2音節で発音する時と比べると、前舌面が硬口蓋よりも前方、つまり、硬口蓋歯茎に位置する。

階程0の閉鎖音は、階程2の母音の影響を受け、階程1の摩擦音へ変化する。声および調音位置の変化は見られない。声と調音位置に基づいて Shockey (2003: 28) の例を抜粋すると、[ˈpeɪfə] *people*, [əβæʊʔ] *about*, [pɹeˈsɛnd] *pretend*, [ɔˈɪɛɹɪ] *already*, [ˈʧɹʌʔ] *chuck it*, [wɪŋɪɹə] *when you go* などがある。左側に母音のない語頭の [p] が示しているように、閉鎖音の両側が母音であることがこの変化の条件のようである。なお、隣接する母音が硬口蓋音性という特徴を持つ母音 [i, ɪ, e, ɛ, æ, a] であると調音位置の同化も生じる。Shockey (2003: 28) から該当例を挙げると、[ɹeçəgnæɪz] *recognize*, [ˈbeːçən] *bacon* がある。狭めの同化により、[k] が [x] へ変化する（声および調音位置の変化は見られない）。さらに、軟口蓋音の [x] は同一音節内にある硬口蓋母音 [e], [ɛː] に調音位置の点で同化し硬口蓋音の [ç] になる（声および狭めの度合いの変化は見られない）。

階程2の有声硬口蓋歯茎音 [j] は、階程0の閉鎖音の影響を受け、階程1の摩擦音 [ʃ] へ変化する。該当例は**融合同化 (coalescent assimilation)**の例のひとつ /t/+j/ → [tʃ] および /d/+j/ → [dʒ] である。音節頭位の /j/ = /j/ の調音位置は硬口蓋歯茎音とすることで、歯茎音 /t/ は調音位置の点で硬口蓋歯茎音 /j/ に同化する。同化の方向は逆行同化（歯茎音は後続子音の調音位置に同化する傾向が強い）である。この分析を採ると、お互いが影響しあって、という双方向の同化は存在しない。

階程2の有声硬口蓋歯茎音 [j] は、階程1の摩擦音の影響を受け、階程1の摩擦音 [ʃ] へ変化する。該当例は、融合同化の例のひとつ /s/+j/ → [ʃ] および /z/+j/ → [ʒ] である。しかし、実情はこれほど単純ではない。結論を先に示す。/s/ または /z/ と /j/ の2子音が同じビートに属する場合は、(1) /s/+j/ → [ʃ]（重子音の単純化により [ʃ]）、(2) /z/+j/ → [ʒ]（重子音の単純化により [ʒ]）と考える。2子音が異なるビートに属する場合は、(3) /s/+j/ → [ʃj]、(4) /z/+j/ → [ʒj] と考える。該当する例を英語音声学の教科書から挙げる。

(1) I'll kiss you in my dreams. (今井 2007: 121)

(2) a. Has your mother come? (ibid.)

b. as you already know (牧野 2005: 145)

(3) She'll turn forty this year. (今井 2007: 120)

(4) a. Those young men are pretty reckless. (ibid.)

b. as usual (竹林・斎藤 2012: 150)

c. as yet (今井 2007: 121)

(1), (2) と (3), (4) との大きな違いは2つある。ひとつは、英語には同一ビート内で重子音がないことから、重子音を単純化する力が (1), (2) では働いている。もうひとつは、(3), (4) が示しているようにビートの境界を挟むと狭めの同化は生じないということである。なお、それぞれの著者は共に (4b), (4c) を (2) /z/+j/ → [ʒ] の例と捉えているようである。付属音声との乖離が見られる。

(宇佐美 文雄)